



〈席交替〉の社会的達成：インタビューにおける回答者地位の委譲をめぐって

檜村，志郎

(Citation)

現代社会理論研究, 4:187-199

(Issue Date)

1994-11

(Resource Type)

journal article

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90006593>



— インタビューにおける回答者地位の委譲をめぐって —

1

- 187 -

- 28 K: しろ(いソ:: スカ[かって])
29 A: [おしろあたり:: あたり:::
30 A: じゃどうでしたかあじは
31 K: これはうまいね::
32 A: うまかったですか。

このデータについてつぎのようなおおまかな解釈ができる。

まず、1行目はAとJの間の発話であり、2行目と3行目では、Kへのよびかけが行なわれている。K、E(職員)はビデオデータでは画面の奥、A、Jからやや離れた場所におり、4行目の発話は、歌である。5行目でAはやや強い調子でよびかけをしながらしている。8行目は、Aによる3度目のよびかけであり、Eによるよびかけも重複してなされている。このようにデータの最初の部分9行目までは、よびかけの試みの連鎖と特徴づけることができるものである。

つぎに、10行目から15行目までは、Kによる応答、Jの発話、AによるKへの指示のようなもの(11行)が見られる。この間にKはそれまでの位置から、A、Jのいる画面前面へと移動している。Aは、何度か「はい」を発話したのち、17行目でKへの質問を発する(16行目は、前質問(pre-question)の1例である)。

最後に、17行目以降のデータの部分では、Aによる質問とKによる答えが連続する質問連鎖(question sequence)ないし問答連鎖(question-answer sequence)が続いていく。これが、給食についてのアンケート調査である。

さて、分析をはじめするために、次の点に注目してほしい。17行目以下の質問連鎖においては、ある特殊な意味で、Aは「質問者」、Kは「回答者」という〈話者地位〉にあると述べることができよう。「特殊な意味」というのは、AとBが単にターンをもっているのではなく、話者として現実に発話していない場合にも存在する、少なくとも相互によって理解し承認された、または規範的に記述できるような、ある承認された権原(title)をもっているように聞こえるからである。

個々の「ターン」を超えるこの権原は、たとえば、サービス窓口の前にいる客がもつような権利と義務をともなっているものである。相互行為の中で観察されうるこのような権原を、本稿では〈席順〉ないし単に〈席〉と呼ぶことにする。たとえば、サービス窓口で待つ客は、店員から注意をむけられ、特定のターンを付与されるためのなんらかの権原としての〈席〉をもつわけである。

あらゆる相互行為の局面において一般的に、このような権原の分配のメカニズムが問題にできる。就職や入学のための面接試験のような場面では、受験者の〈席〉の分配は試験官ないし試験当局によって行なわれる。すなわち、面接受験者は、当局者によって呼び出されたときのみ、試験室に入り、質問をうけることができる。その他の場合(電車を待つ乗客の列など)にはそれは乗客自身に集合的に管理される度合いがより高くなる。

以上のような前提がおけるならば、本稿でとりあげようとする問題は、一般的にいうと、いかにしてこのような〈席〉は移動するのだろうか、という問題にかかわる。

ところでAとKとが、このような話者としての特殊な〈席〉を付与されたとすれば、1-16行にわたる相互行為は、一種の努力ないし準備作業であったと判断できよう。この

見方では、データの前半は、データの後半の出来事を達成するための実践とみることになる。さらにそのような<席>を以前はJがもっていたとすると、データの全体は、話者<席交替>の実践過程とみることができるかもしれないといえる。

本稿での第1の課題は、この実践がどのような原理から成り立っているか、その実践の詳細はどのようなものであるか、そこにはなんらかの一般化できるルールもまた妥当しているのか、これらをこの状況の詳細の様相として示すことである。具体的にいうと、AやKはいかにして現に進行する会話的实践の遂行のなかで質問者や回答者の<席>をどのようにしてかちえたのかを、人々の方法論の実践として、理解することである。

本稿の第2の課題は、具体的な相互行為の組織を理解するために映像データが利用できる一つの可能性を示すことである。

本稿の最後の課題は、つぎのことである。もし、具体的な相互行為の過程として、<席>の受け渡しが行なわれ、そしてその<席>という現象がわれわれの社会において集合的かつ規範的に支えられた地位や権原を意味するとすれば、<席>の受け渡し過程は、規範的な次元をもった出来事ということになる。この出来事の組織はいかなるものか。つまり具体的な状況の中で、その状況を規律することにかかわるルールはいかなる形で存在しているのか、という問題に答えることである。

2

会話分析の方法とは、日常会話のなかにはある自然的な規則性ないし秩序性が見て取れるという事実を出発点とするものである。会話分析とは、会話のこの秩序性をとりだすための研究手法といえよう。会話分析は、次の諸側面に注意を払う。1) 発話順番(ターン)、2) ターンの連鎖、3) ターンの重なり、4) ターンの「間」、5) ターンの連鎖的(逐次的)構築による出来事の達成、6) ターンの時間的構成、つまり、ターンの前連結部分(はじめ)・中核部分(真中)・後連結部分(おわり)の諸機能、7) ターンの特徴的な結合、つまり、隣接発話対の使用による連鎖の制御、8) 隣接発話対の使用による連鎖の切替え、などである。(注2)。

さて、冒頭に掲げた会話では、最初の秩序性は、line 2ないしline 3の「よびかけ」によって始まっている。「よびかけ」は<よびかけ-応答>という隣接発話対の第1対部分とみなされえ、ひきつづくターンがその第2対部分「応答」となることを標準的に期待させる。実際には、この応答はline 10まで起こらず、line 5、line 8、line 9という<よびかけ連鎖>が発生している。連鎖の発生は、よびかけへの期待される応答の不存在という会話的出来事によって説明できる。ここで、<応答の不存在>は、line 4という「よびかけ後の場所」での「応答」として認定できない発話の発生と、line 5でのAによる「再よびかけ」によって表出される直前(line 4)の発話の応答性の不承認というターン連鎖によって生み出される出来事であり、それとともに、その出来事の以上のような意味が、場面の参与者によるその同一の隣接発話対の使用によって報告可能なものとして構築され、誰もが知っているその秩序性を背景として認定可能になるものである。

Line 11は、Kへの「よびかけ」への「応答」(line 10)の発生をうけて、「Kへのアンケートの開始」ともいえる出来事を生み出そうとするAのターンである。このターンは「ちょっと」という<依頼前置き>という前連結部と、「はい」という<促し>または

＜切替え標識＞と解釈できる後連結部をもって、「よびかけ連鎖」と「アンケート開始」を媒介する作用をもっているように見える。このターンの中核部は、それ自体が＜依頼一諾否＞という隣接発話対の第1部分であり、次のターンを制約することで、「アンケートの始まり」という出来事の発生に寄与しようとしている。この最後の点はつぎのような意味である。「ちょっといすをもってきて」という発話は、Kにむけられた依頼であり、これが隣接発話対の第1対部分であるという事情により、その発話の時点において、つぎにひきつづくべきKのターンが「承諾」であるか「拒否」であるかのいずれかであるという強力な報告可能性に裏づけられた規範的期待を生み出している。ここで、依頼に対する優先構造は「承諾」または依頼されたことの実行であるから、Kの行為と発話の選択肢は、「いすをもってくる」その他の承諾発話／行為へと「促されて」いることにもなるわけである。「いすをもってくる」ことが「アンケート開始」を構成する部分行為であり、その出来事の達成への協力であることはいうまでもない。ここにAのターンの注目すべき方法的な性格があらわれている。

さて、先に、この会話全体で達成されるのが、アンケートに関する質問者／回答者＜席交替＞であるという解釈を示唆しておいた。以上の分析からは、Aの方法論的実践の重要性が浮かび上がるように思われる。Aのline 11のもつ以上のようなメカニズムはいくつかの点から（注3）話者＜席交替＞を達成させる「ルール」とよぶことができると考える。このルール＝メカニズムを「中央制御型の話者交替ルール」とよぶことにしよう。

しかし、この解釈には疑問が提起できる。まず、line 11の試みは、実際にはline 17まで成功しない。line 11の依頼は完結せず、「いいさし」の形になっている。これは、映像によると、Jが席を立ったからである。そしてこの依頼は、強力な規範的期待を生み出しているはずであるにもかかわらず、実現へと追求されることなくいわば途中で放棄されている格好になっている。これはなぜか。さらに、アンケートの質問らしいものが発せられるのはline 17である。line 16は、「質問の宣言」ともいえるべきターンである。Aはここで重なりによって妨害されないターンを獲得しているにもかかわらず、なぜ単刀直入に「アンケートの始まり」へと移行しないのだろうか。この観察は、さらに、line 12-15の間の「おうっ」の多発、およびAによる「はい」の繰り返しをも考慮する（注4）ことで、ここでなんらかの会話連鎖上のトラブルが発生しているのではないか、という解釈を強める。この観察は、line 11の相互作用効果についての上の説明に疑問を投げかけるものである。

要するに、line 11は、なんらかの点で失敗しているように見える。すくなくとも非常に大きなトラブルを含むもののように構成されている。そのトラブルとはいかなるものであり、どこにその原因があるのか。また、これらの付近に見られるトラブルは相互作用の達成に関して何を示唆しているのか。つぎに、これらの問いに答えるまえに、映像データからよみとれるものへと目を転じてみよう。

3

日常的会話において会話参加者のまわりの空間は、方向性をもつ音声、視覚的遠近法によって、構成されつつあるもの、つまり身体図式（注5）としての様相を備えていると考えられる。

映像データは、不完全にはあるが、日常の会話者が用いる、身体図式に関する情報を

研究可能なものとしてくれる。人々は、どのような空間的様相を重視するのだろうか、そしてまた、会話分析研究のための手段としてのトランスクリプトはどの程度までその様相を記号的に定着できるのだろうか（注6）。

文末に掲げるトランスクリプトは、冒頭に掲げたデータ（TUBASA 92/9/2 #1s）の冒頭からAの「はいそこで問題です」までの部分を映像にもとづいて転記したものである。トランスクリプトは、印刷の便宜上、(1)から(5)までに分割して示してある。時間は横に進んでおり、最上行に引用の便宜のために時計の秒数が目盛ってある。転記記号の説明は本文末尾にある。

このトランスクリプトを手がかりとして何がわかるか、考えてみたい。まず、それはつぎの2つの一般的様相について記録しようとしている。

第1の様相は、「だれが当事者か」が選択的に重視されることである。具体的な会話は一定の参加者によって空間的に組織されており、誰がその会話場面の参与者であるかは、人々によって共働的に把握されている（注7）。会話場面の実効的な共働参与者を、その場面の〈公式のメンバー〉と区別して〈会話コホート〉と呼ぶことができる（注8）。映像場面のすべての登場人物がトランスクリプトに転記される必要があるわけではないが、会話コホートはひとびとの把握の実践とともに変動する。例えば、12:45:44にJはKとAの会話領域から出ていき、それはトランスクリプトからも消えることで示される。Sは12:45:52ごろに画面奥側のテーブルで食事をはじめ、Kへの視線をおくることでKAの会話領域への片面的な関与を示している（注9）が、再び近づいてきたJが話しかける（12:46:04以降）とSJ会話の当事者になる。

第2の重要な様相は、動作と視線と言葉の同時的遂行という一般的事実である。例えば、12:45:25でAは部屋の反対側（画面奥）でKE会話に参加しているKへと視線を送るが、それと同時にAJ会話の参与者であるJもKへと視線を送る。Aは視線をただちに手元におとすが、それにひきつづく「*たばさー」のよびかけはKへのものである。この間Jも一度視線をそらす再びKを見て同じよびかけを先行して行なう。このことから2つのことが分かる。

第1に、一人の行為者の行為のなかで、視線と発語は文脈的な規定性をもっている。12:45:26および12:45:29のAのよびかけがKへのよびかけであると聞きうるのは、12:45:25の視線があって、それらが一つの行為という運動へと包摂されるように調整されて生み出されているからである（注10）。

第2に、12:45:25のJの視線は、Aの視線や発語に対する同時性、および先行性のなかに、Aの行為運動への共働性が示されるように調整されて生み出されている。Aが紙へと視線と動作の対象を移す（12:45:27）とともに、その〈他人の行為の対象〉へとためらいがちな視線を送ること（Jの12:45:27-28）も、その紙がアンケート用紙であって、それへの注目がJに対するアンケートの終了行為の部分でありうるという意味を考えると、JのAへの共働性という意味ではあるが、会話コホートAJから会話コホートAKへの移行へと志向する共働性をはっきりと示している。

要するに、映像と方向性をもつ音声の世界のなかでの相互行為者によって、反省的に用いられる原初的な様相というものがあり、それは場面への関与者の特定性、動作の場面内の協調性などの関係性を重要な様相としているといえよう。これらは場面のなかで反省

的に展開される動作が、相互に織り合わされていくうえで、基本的な重要性をもって用いられる様相である。

4

さて、以上のような点の検討の上にたって、話者交替ルールの中央制御型と呼んだわれわれのデータ解釈が正しいかどうかを簡単に検討しよう。

さて、以下の簡略な分析では、つぎの解釈を主張したい。それは、Aによる「ちょっといすをもってきて」という＜話者交替としてのアンケート開始の試み＞は、この場面の中でルールとして提示され構成されることに失敗し、それとは異なった＜話者交替の実践＞によってとってかわられた、というものである。このことを理解するためには、まず、＜話者交替としてのアンケートの開始＞がAのみの実践ではなく、この場面での異なった会話コホートに属する複数のひとびとの共働的实践であるということを示す必要がある。

もともとAによるKへのよびかけは、会話コホートA JのメンバーであるJによっても共働的に実践されていた。よびかけられたKはしかし会話コホートK Eへの帰属を行ない続けている。12:45:25-33までの間Kの視線は12:45:30にただ一瞬Aへと向けられる以外はEへと向けられ続けている。12:45:34に食事への専念を示していた(注11) Eは、Kへと視線を移しながらKの呼び名ないしは「いって」と聞こえる発話を行なう。それに呼応するかのように、KはEとの間のアイ・コンタクトを行なうことなく、視線を身体前方に投げ、会話A Jの局域に向かって移動を始める。このとき、Kは返事と受諾合図動作を行なっている。ここでは、よびかけられた者が現在進行している会話への所属を提示している場合、その会話コホートの他のメンバーがそのターンを用いて、その会話からへの離脱ないし解放を行なうという形で、よびかけへの援助が行なわれたとすることができる。

近づいてきたKは、テーブルに視線を置き、挙げていた手をおろして、到着を示している。Eはこのときすでに食事に専念している。Aがテーブル面からもちあげた紙を見ながら、それを左前方の席に置き直し、同時に「ちょっと」と言いかける(12:45:39)が、ひきつづく1秒の間に、先に見たようにこの試みは放棄されていく。Aによるこの依頼は、全面的な関与をもつ行為(その例は、視線と発話と動作の同時的共働が見られる12:45:34のAのよびかけである)としてではなく、部分的な関わりのみをもつ行為として提示されていることが気づかれる。Aによる関わりの小ささは、依頼の放棄の説明の一つになりうる。

しかし、Aの依頼の中断と放棄はむしろJの立ち上がり(12:45:39)に応じたものであると考えられる。Kの発話(12:45:40)はその身体の位置(Jの後ろでAの対面)からすると、このJの動作および自己のすわる動作に対するかけ声のように聞こえる。ここにはKとJとの間の共働があるように思われ、それはJによるKへの＜席＞の譲渡しといえる出来事を達成している。そして、この共働動作は、KやJではなく紙と机に視線を落としているAを除外して行なわれており、Jによる同じかけ声(12:45:43の「おうっ」)によって終結へともたらされる。Aは、2度にわたりその＜席＞の移行を追認する発話(12:45:40の「あここがあく、はい」およびKの着席直後の「はい」)を行ない、その後、12:45:43-49の間の動作が一々示す相互行為からの一時退出を行なう。K Jによる「席譲り」の共働、およびAによるその追認というこの一連の相互行為が示唆しているのは、ここでの

＜話者交替＞が、Aによる「指令」の存在を示唆する「中央制御型」ではなくて、むしろKJの「合意」による席の受け渡しというルール＝メカニズムによるものであるということを示唆するものである。このメカニズムにおいては、「面接試験」のように試験官が＜席＞の移行を司るのではなく、＜席＞を現に占めている者（＜席＞の保持者）と＜席＞へのクレームを持つもの（＜席＞の請求権者）がその移行を共働的に司っているといえると思われる。

さて、以上の検討があきらかにしたことは、つぎのことである。アンケートの回答者という＜席＞の交替は、AによるKの選択（つまり次の＜席＞への請求権のKへの付与）によって開始され、その過程の中でJからKへの＜席＞の譲渡がAによって追認されているという意味では、「中央制御型」の特徴をもつけれども、むしろより相互行為に内在する形で存在している組織性は、会話コホートKJからなる＜席＞の「分散型」の譲渡をより優先するようなものであったと思われる。なお、Kの選択自体についてもJによる共働が存在しており、会話はJがより先に選択をしてさえていることにも注意するべきである。さらに＜席＞交替の一つの過程としてみなすならば、そこにはA以外のさまざまな人々の共働行為が見て取れる。われわれは先にEによる会話切断がいかにしてAのよびかけへの協力となりうるかを見たが、これと同じように、会話AJの終結にむけられた視線、動作のJによる微細な共働も存在する。これらの出来事が時間的空間的に調整された形で生み出されることにより、＜席＞の移行は、Aによる制御に依存しないばかりか、それに優先性をもつようなメカニズムによって達成されたのである。

この検討からより一般的な示唆をあえて引き出しておくならば、つぎのようにいえよう。この相互行為断片の全体をみると、それを＜われわれのなんらかのルールの実現＞として報告することは容易であるようにみえる。例えば、＜Jの次はK＞とか、＜Aの選択する人が次に来る＞などである。このような語りの中では、規範的かつ言表的に妥当するルールと現実に妥当するルールとがいかにして一致するかは一義的には定まらないが、これは日常生活者にとっては重要な問題ではない。というのは、＜われわれのなんらかのルールの実現＞として報告可能であるようなこの過程は、現実的な規範的妥当性が一義的に決定されたルールが与えられえなくとも、進行し、その＜われわれのなんらかのルールの1事例＞としての報告可能性を達成できるからである。このような過程が実践的に進行する前提は、Aによる選択がKにむけられており、AはつぎにKへの面接を行なうことを表示的に意図しているということが、相互行為コホートのもつ形式的な＜席交替＞の方法的理解に結びつけられるということである。それが実際の場面の特有性に応じた＜ルール使用の場面に固有の実践＞を集合的に解き放つのである。＜席交替＞の＜ルール適合性格＞は、それが集合的に実効的な理解を実効的に表示しつつ生み出される協調的な方法的実践として報告可能である、という点にある。このような理解やその表示が状況の外部にある原理や権威その他の規範的なものに結びつけられているという証拠はない。むしろ「職員」Aによる指令の失敗というこの事例が示唆していることは、ある実践の＜ルール適合性＞は、状況の固有性に沿ってのみできあがるものとして、相互行為コホートがその場その場において機会的に構成していく連鎖のありさまなのではないかということである。

<トランスクリプト記号の説明>

○ 発話（発話は、発話者を示すアルファベット記号と:に引続いて示す）

- () : 聞き取れない発話
- : : 直前の音が伸ばされていることを示す
- [: 発話の重なるの開始（ * で示すこともある）
-] : 発話の重なるの終了（示さないこともある）
- (数字) : 発話の間（数字は秒数）
- (.) : 一瞬の間
- = : 前の発話に引続いて後の発話が発せられていることを示す

○ 視線（発話者の視線は、発話の上の行に示してある）

- *** : 静止した視線
- #### : 接近した視線（アイ・コンタクトなし）
- !(0.1)! : アイ・コンタクト（その秒数）
- +++ : 動作視線（動作のため周囲にむけられた視線）
- : 自己視線（動作のため手元など自己領域にむけられた視線）
- """" : 対象をもとめて動いている／対象をとらえずさまよっている視線
- ++EEEE : 人に対する動作視線が相手(E)をとらえた時
- ##EEEE : 人に対する接近視線が相手(E)をとらえた時
- ""EEEE : 動いている視線が相手(E)をとらえた時
- ES\$\$\$\$: 動く対象をとらえている視線／対象をとらえつつ動いている視線
- eeeeee : 相手(E)から自然には見えない場所（例：背後）からの視線
（Eが実際に見ているか否かにかかわらず）
- () : 画面から消えている動作／視線

○ 動作（発話者の動作は、発話の下の方に示してある）

- "" : 連続する違った動作の間（動作移行時）
- [文字] : 動作とその継続
- \$: 姿勢の変化
- * : 静止した姿勢
- () : 画面から消えている動作／視線

<トランスクリプト>

#1 [TUBASA 91/9/2 #1: (12:45:25-12:45:59) With gaze & body movement. 28 seconds.

(1) (12:45:25-12:45:31)

25 26 27 28 29 30 31

```

#####EEEEEEEEEE!!!!EEEEEEEEEEEEEEEEEEEEEE"AA"EEE

```

K: (2.0) ひのひのよ::ひの HeHeHHHe

“Klllll”

E:

+++++""KKK""""-----+紙+++++

A:はいじゃあって *たばさ:::::::::: まっさ:::::(.5)

「紙ヲトリメクル

-----"KKKK"-----紐++++++紐++++++

1: たばくん たばく::ん

(2) (12:45:32 - 12:45:38)

32 33 34 35 36 37 38

FFFFFFFFFFFFFFFFFFFFFFFFFFFFF”””-----\$-----+ツクエ+

K: (まゆげ) おっ

おっ

「手アケ」移動 ; 手オツ到着

” ” ” ” KKKKKKKKKKKKK ” ” ” ————— ()

E: * (たばくん)

* (い) って

「食事() ;」

-----紙-----\$\$紙**KKKKKKKKKKKKKKKKKKKKK'""-紙-----""""""""-紙-----

A: *生さ:.....あ

: 「顔ヲムケ紙トル」

紙

「顔ニ手」 ; ハズ' ス

【註】

(1) 本稿の基礎となった調査は、皆川満寿美、藤村正之両氏とともに、1992年春～夏に行なったものである。そのうち8月から9月にかけての約1週間に参与観察とともにビデオ撮影を行なった。この調査に関しては、皆川満寿美・榎村志郎・藤村正之「共同作業所の社会学のために——社会福祉施設をめぐるフィールド・ワークより——」『武蔵大学人文学会雑誌』第25巻2・3号106頁～150(1993年)、皆川満寿美「『無関与』の協働的達成」『現代社会理論研究』第3号47～67頁(1993年)、藤村正之「ライン作業に置ける〈ミス〉定義の投企——『作業課題』領域の相互行為的構成——」『微視的権力状況における会話分析(平成2～4年度研究費補助金(総合研究A)研究成果報告書』41～54頁(1993年)、皆川満寿美「『ホームルーム』(共同作業所における):トランスクリプト」(同、85頁～104)がある。本稿は、1994年4月23日のエスノメソドロジー・会話分析研究会(東京都立大学)で「会話分析からビデオ分析へ——『話者地位交替のルール』を素材として——」として報告されたものを基本としている。

(2) エマニュエル・シュエグロフ、ハーヴィー・サックス「会話はどのように終了されるのか」G.サーサス他『日常性の解剖学——知と会話——』(北澤裕・西阪仰訳、マルジュ社、1989年所収、とくに177～183頁参照。

(3) 規範的なものの概念について、D.L.ウィーダー「受刑者コード」H.ガーフィンケル他『エスノメソドロジー』(山田富秋・好井裕明・山崎敬一訳、せりか書房、1987年)所収、榎村志郎「法律的研究の社会組織」好井裕明編『エスノメソドロジーの実現——せめぎあう〈生〉と〈常〉』(世界思想社、1992年)所収を参照。

(4) これは、なにごとかを開始する標識ないし合図として解釈することができるが、そうだとすると、「はい」の反復は、Aが出来事の意図された開始に何度も失敗しているか、あるいはその達成を慎重な仕方でおこなっているということになる。

(5) M.メルロー＝ポンティ『知覚の現象学・1』(竹内芳郎・小木貞孝訳、みすず書房、1967年)235頁以下参照。

(6) 会話分析では、トランスクリプトの目的は、会話が尊重する会話の重要な様相がいかなるものであるかという点に関する、読者の理解を助けることである。トランスクリプトは、会話分析のためのデータそのものではなく、自然に生起する現実を再観察するための用具、あるいは、状況の感知可能な様相を再体験するための覚え書きであるといつてよい。そのために作成者は、転記のルールを用いることになる。本来はトランスクリプトはそれが記録しようとする現象と切り離してとりあつかわれるべきではないといえる。

(7) 皆川満寿美「『無関与』の協働的達成」『前掲』47頁、67頁(注21)参照。

(8) 〈会話コホート〉は会話の自然な秩序性を局所的に産出する「仲間」である。これは「秩序の局所的産出コホート」の1例である。さしあたり、Eric Livingston, MAKING SENSE OF ETHNOMETHODOLOGY(Routledge & Kegan Paul, 1987), pp.10-11参照。

(9) Sはアンケート終了後にKに話しかけることになる。

(10) M.メルロー＝ポンティ『前掲』236頁参照。

(11) 食事へと専念していたとはいえない。というのは、ビデオの観察からは、Aによる

よびかけが聞こえている間、Eは食物を口へと運んでいないように見えるからである。それは、あたかも数秒後の発話を準備しているかのようにも見える。